

作名 「蒼光のピアス」

「蒼光のピアス」・登場人物表

黒田 蒼<sup>あおい</sup>（ 2 9 ） 主人公。普通の会社員。

山縣 光<sup>ひかり</sup>（ 2 4 ） 売れない女優。

警官

○ 光の部屋 ( N )

荷物整理中の雑多な部屋。

壁には掛けられたままの男女の写真。

部屋の真ん中で男女がテーブルを介し向かい合い、お互いが目を合わさずに下を向いている。

そして、テーブルの真ん中には白い封筒と飲みかけの水の入ったグラスが2つ。

山縣光 ( 2 4 ) の目の前には鍵が一本置かれ、黒田蒼 ( 2 9 ) の前には行き場を失ったキーケースが置かれている。

無言の二人。時計の針は二三時。

蒼 「本当にこれでいいのか？」

うなづく光。

蒼 「分かった」

無言の二人。

時計の針は二三時十分。

光 「なんか緊張するね。こうやって向かい合ってる」と

蒼 「そうだな……」

光 「（鍵を手に取りながら）この鍵渡す時  
も緊張した」

蒼 「煙草をやめる説得もここでされた」

光 「あれは、部屋に煙が付くと引越しの  
時退去費ばかりにならないし、それに……  
喉に悪いから」

光、立ち上がり、引き出しから煙草  
とライターを取り出す。

光 「（差し出して）はい、返す」

蒼 「今更だな」

光 「捨てられないよ。蒼の物だもん」

蒼、煙草とライターを受け取る。

蒼 「あれ以来俺、1本も吸ってなかった

な。会社でも。あとお前の寝相が悪くて

俺の睡眠時間が妨害されてるこの話合

いもここだったっけ」

光 「（椅子に座りながら）それでダブルベッドに買い替えたね」

○ 光の部屋 （D） 回想

ベッドで寝転がって笑い合う二人。

○ 光の部屋 （Z） 現在

向かい合っている蒼と光。

蒼 「（部屋を見渡しながら）この部屋で色々あったな。ありがとな」

光 「こちらこそ」

笑い合う二人。

鍵を封筒にしまう、光。

時計の針は二三時二十分。

蒼 「あ、俺が初めてあげたピアス覚えてるか？女子が好きそうなピアス」

光 「あれは困っちゃったな」

蒼 「女優なのに穴が一つもないことに驚いたよ。ネックレスにすればよかつたって、すごい後悔した」

光 「（耳を触りながら）あれからなんと

くしばらく気まずかったね」

立ち上がり、箱からピアスを取り出

す光。

蒼にピアスを見せる。

青く丸いピアスが2つ。

蒼 「……」

光 「このピアス一度は着けたかったな」

光、ピアスを耳にかざす。

光 「どう？ 似合う？」

蒼 「……前もそうやってたな」

光の手からピアスを奪う蒼。

蒼、そのまま、ゴミ箱に入れる

ゴミ箱に入っている2つのピアス。

光 「蒼はさ、これで……本当にいいの？」

ピアスを見つめる、光。

蒼 「ああ」

光 「本当に、これで後悔ない？」

光、蒼の顔を見つめる。

蒼 「（目を逸らして）……ないよ。俺は後

悔でできる程の人間じゃない」

光 「そっか……」

蒼 「あるのか？何か」

光 「私は……」

蒼 「……俺のことは気にしなくていい」

光 「（遮って）ううん。私も……ない」

蒼 「そうか……」

蒼 、まともめられている製本された台

本の山から一冊手に取る。

ページをめくる蒼。

【通行人女 山縣 光】の文字を見

つけ、指でなぞる。

蒼 「最初は光と俺は似ていると思ったよ。

何者かになれない同士だつて。でも知れ

ば知るほど光は俺とは違つた。俺はただ

の一般人の凡人だ。会社では上司の顔色

伺つてばかりで、俺がいなくなつても誰

も困らない。3日も経てば俺のことなん

か忘れる。でも光は違う。小さくても希

望がある。それを痛い程感じた。光は何  
者かになれる。俺とは生きる世界が違  
うんだ。ほんの一時でも誰かの記憶に残  
り、誰かを救うこともできるかもしれな  
い。それは光にしかできない。

光 「（遮って）やめて！！」

蒼、驚いて光を見る。

時計の針は二三時三十分。

光 「もういいの。もういいから。お願い」

蒼 「：：」

光、蒼から強引に台本を奪い取る。

それを台本の山に投げ捨てる。

光 「（紐を絞めながら）寒いね。そろそろ

ストロブでも点けようよ」

蒼 「：：分かった」

石油ストロブに火を点けようとする

光。

が、手が震えて火が点かない。

蒼、代わりに点ける。

青く燃える炎。



その炎を見つめる光。

光 「あたしも、凡人だよ。ねえ……。やっ  
ぱり蒼と一緒に……ううん。やっぱさ、蒼  
に開けてほしい。ピアス」

蒼 「え？」

光 「（蒼に近づきながら）好きな人に開け  
られる傷ほど、愛おしい傷つてないでし  
よう。一生塞がらないように開けて欲し  
いの。最後のお願い」

光、ゴミ箱からピアスを拾い蒼の手  
にピアスを乗せる。

そして、蒼の手を取り、ゆっくりと

自分の耳たぶに触れさせる光。

光、顔を近づけ、目を閉じる。

蒼 「……ごめん」

離れる、光。

気まずい2人。

× × ×

机に伏せて寝ている光。

蒼、そっと光の髪を撫でる。

フラフラと立ち上がり、閉めていた  
カーテンを乱暴に開ける。  
ガムテープで目張りされている窓。  
乱暴にテープを引き剥がし、勢いよ  
く窓を開け、外の空気を吸う、蒼。  
街がネオンで轟轟と光っている。  
振り返り、光を見つめる。  
テーブルの上の「遺書」と書かれ  
た白い封筒から一枚の紙を取り出し  
破く、蒼。  
縛られた台本の紐をちぎる。  
蒼、ピアスを一つ取る。  
空の睡眠薬の薬シート。  
時計の針は二三時四十分

○ マンション 階段 (N)

蒼、フラフラと階段を登っている。  
躓きながらも階段を登る。

○ マンション 屋上 (N)

蒼、屋上の扉を開ける。

都会の煌びやかな夜景。

遠くのネオン時計は二三時五十分。

震える手で煙草に火を点けようとす

るが上手く火が点かない。

ようやく煙草に火が点き、空を見上

げる蒼。

蒼「忘れんなよ」

真っ黒な空に、煙草の灰色の煙が雲

のよう流れる。

目を瞑り、もう一度煙草を吸う蒼。

蒼の耳に青いピアス一つ。

蒼「せめて……」

灰色の雲が垂直に流れた。

× × ×

誰もいない、屋上。

○ 光の部屋 ( D )

薄暗い室内。開いた窓から外の明か

りが薄っすら入る。

窓を見つめている光。

ぼさぼさの髪に、酷い限。

光、部屋を見渡す。

時計の針が十二を指している。

誰もいないダイニングテーブル。

破かれた光の遺書。

激しい玄関のチャイム音。

「これで光の何者かになれる」と書

かれた蒼の遺書を握りしめる光。

警官の声「山縣さん。開けてください」

耳を触る、光。

光「開けられません。まだ、思い出したく

ありません……」

太陽の光が反射して、蒼いピアスが

つ、耳で笑うように光っている。

( 終 わ り )